



日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.70

日本ルイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF）2011年12月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL047-351-4464 FAX047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp
ホームページ <http://members3.icom.home.ne.jp/wjf/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

3・11東日本大震災からちょうど半年、外山夫妻が3度目の仙台入り ニューオリンズからの激励メッセージとサイン入り日章旗も披露 大賑わいの「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」を彩る

3・11東日本大震災からちょうど半年が過ぎ去った9月10、11の両日、外山喜雄・恵子夫妻は震災後3度目、子供たちの元気な笑顔が待つ仙台入りし、その晴れやかな成長ぶりに目を細めた。両日、仙台市内で開催された「第21回定禅寺ストリートジャズフェスティバル(JSF)」では、子供たちや地元のミュージシャンとも共演、ニューオリンズから送られてきたばかりの、同市滞在のミュージシャンらのサインと激励メッセージで埋め尽くされた大きな日章旗も披露され、メインステージでは集まった数千人のファンから惜しみない歓迎の拍手がわき上がった。その“一等地”、ステージに一番近いテントには、なんと！日本ルイ・アームストロング協会の立派なブースまで作られ、“銃に代えて楽器を！”というWJFの長年にわたる活動ぶりが紹介され、なかなかの賑わいを見せていた。



スイング・ドルフィンのステージで外山夫妻とともにニューオリンズからの「激励の日章旗」が披露された(写真上)、パネルもいっぱい飾られたWJFのブース(写真左下)、大震災の発生時間、午後2時46分に追悼の「A音合奏」とともに黙祷する聴衆のみなさん(写真右下=後方の格子縞のテントがWJFのブース)=いずれも9月11日、仙台市でのJSFメイン会場で

「音楽の星・地球～ここから～」仙台・定禅寺ストリートジャズフェスティバルへ 入場無料！ 730グループが参加、市内45ステージに観客70万人！

飲食店、売店…模擬店のテントが連なり メインステージ脇にWJFの立派なブース

「定禅寺ストリートジャズフェスティバル(JSF)」は、例年9月の第2土・日曜日、仙台市の定禅寺(じょうぜんじ)通りを中心に開催され、今年は数えて21回目。仙台市の都心部各所になんと！45ステージが設けられ、今年のテーマは「音楽の星・地球～ここから～」、参加は730グループを超えた。

ジャンルはもちろんジャズが中心だが、フュージョン、ボサ・ノヴァ、ロック、ブルース、ソウル、ゴスペル、ポップス、カントリー、オールデイズ、邦楽、その他！？…と、まあ何でもあります。入場はもちろんどの

会場も出入り自由で無料。観客はここ数年、前夜祭も含めて70万人を超えている。

メインステージのある勾当台(こうとうだい)市民広場など主だった会場には、テントが連なり、Tシャツ、キャップ、タンブラー、マグカップ、缶バッジなど公式グッズの販売ブース、お好み焼き、焼きそば、たこ焼き…それにビール、

ワイン、各種ドリンク、アイス、かき氷のお店…まるでB級グルメ大会を思わせる模擬店が建ち並ぶ。どこも、長い行列が出来るほどの賑わい。そんな大入り満員のメインステージに一番近い「JSF復興支援プロジェクト」のテントに日本ルイ・アームストロング協会と大きく刷り込まれた立派なブースが作られていた(写真上)。それもそのはず！長年JSFの開催に尽力され、

黒人ジュニアジャズメンのフィギュア販売などで、WJFを通じてニューオーリンズにも多額の義援金、計90万円！も送ってくれている佐々木孝夫さん(仙台市内の粋なジャズ・カフェ「ジャズ・ミー・ブルース nola」店主)の大きな力添えがあったからこそ！なのです。

「ジャズ・ミー・ブルース nola」佐々木さん WJFのバッジやコースターの販売に尽力

先に、大震災の津波ですべての楽器を流されてしまった宮城・気仙沼市のジュニアジャズオーケストラ「スウィング・

ドルフィンズ(SD)」と、多賀城市の子供ジャズバンド「ブライトキッズ」に、ニューオーリンズからの寄付金による楽器の寄贈に当たっても、率先して仲介の労をとってくださった。この子供たちの2つのバンドがJSFの大舞台に出演することが、佐々木さんから伝えられ、WJFのブースも作られるとあって、外山夫妻ともども私(小泉)も、お手伝いを兼ねて、

取材に出掛けることになった。テント内にはWJFの支援活動を伝える写真パネルがズラリ。ニューオーリンズからの「恩返し」の詳細を伝えるWJFの会報69号なども並べられている。ジャズメンフィギュア(100セットが1日で完売！)、サッチモの顔が入ったWJF特製コースター、缶バッジなども販売され、それも、たちまち完売！ブースでは、生ビ

ール(1杯から50円を支援金に)も販売されていたので、佐々木さんご自身も、手伝ってくれていたボランティアのみなさんも大忙し。



「不死鳥ニッポン、ガンバレ！」の寄せ書き ニューオーリンズからの激励「日章旗」を展示

このブース真ん中を鮮やかに飾っていたのが、ニューオーリンズから外山夫妻に送られてきた「激励の日章旗」。ニューオーリンズ市の市章の入った日の丸には「♪Let's Swing For Brighter Days. You are always in the hearts of New Orleans」と大きくプリントされ、周囲の白い部分にはミュージシャンからの英文の



WJFブースに飾られた日章旗の前で外山夫妻(左)と佐々木さん

激励メッセージとそのサインがびっしり。「大丈夫！ きっと大丈夫、立ち上がれる、ただひたすら信じて、がんばろう日本！！」とか、「不死鳥ニッポン、ガンバレ！」などの日本語もいっぱい。ハンゲルもありますね。

この日章旗は、SDなど楽器購入の寄金を送ってくれたティピティナス財団を手伝う、ニューオーリンズ在住の女性ピアニスト、小牧恵子さんから送られてきたもの。3・11の後、ミュージシャンたちが日本のためにベネフィット・コンサートを開催してくれた際、日の丸を作って会場に飾っていたと

ころ、出演者たちが日本への応援メッセージを書き込んでくれたという。以来、小牧さんは何かあるごとに、旗を持ち出しては、ミュージシャンにメッセージをお願いしてきた。

伝説的アーティスト、アラン・トゥーサン(p,v)や、アービン・メイフィールド(tp)、ネビル・ブラザーズのメンバー、カーミット・ラフィンス(tp)…などのニューオリンズの著名なミュージシャンや関係者、総勢72人が寄せ書きをしてくれた。多忙なアーティストには、小牧さんがわざわざレコーディング・スタジオやライブ会場まで出向いてお願いをしたという。

ハリケーン・カトリーナで被災経験のある彼らは皆、日本の悲劇に心から共

感してくれて、快くサインをしてくれたそうだ。



まるでニューオリンズ！炎天下の“杜の都” “全国音楽祭ミーティング”で支援活動PR

外山夫妻との仙台入りは、1

0日お昼前。この日はかんかん照りで東北とは思えない、9月というのに焼けるような暑さ。仙台駅を降りた時から汗がしたたれ落ちる。それでも、さすが“杜の都”、イチョウやケヤキ並木は緑のトンネルとなっ

て道路を覆い尽くし、ちよっぴり暑さを忘れさせてくれる。ところが、会場はどこも“ストリートジャズ”だけあって、直射日光を浴びる炎天下。いやが上にもニューオリンズを思い起こさせてくれる。WJF ブースで販売されていた生ビールが、本当に美味しかった。

この日は、午後2時10分から県庁舎前で演奏する「ブライトキッズ」が外山夫妻のお目当て。が、その前に市役所会議室での“全国音楽祭ミーティング”に出席、JSF 実行委員長、榊原光裕さんの司会で東北から沖縄まで10団体の音楽祭関係者が紹介され、それぞれの活動ぶりを披露。もちろん外山夫妻も拍手で迎えられ、1994年に設立されて以来、“銃に代えて楽器を！”のスローガンのもと、WJF がニューオリンズへすでに800本近い楽器を贈り続けていること、その“恩返し”として、今度はニューオリンズから大震災で楽器を失った子供たちに、これを補充するた

めの義援金が贈られてきたこと、さらにこの度、ニューオリンズのミュージシャンらから激励メッセージで埋められた日章旗が送られてきたことなど、日章旗を広げてお披露目。これにはみなさんから感動の声が漏れる。

多賀城「ブライトキッズ」と笑顔の再会 大地震発生時刻に「鎮魂のA音」合奏

この後、大急ぎで…いやもう駆け足で少し離れた県庁舎前へ。「ブライトキッズ」の演奏はすでに始まっていて、テキーラ！なあんで元気なかけ声が響く。かねてからの要望

で寄贈されていたソプラノサクソも初お目見えしていた。そんな中で迎えた大地震発生時刻の午後2時46分。翌11日も同じように、この時刻には

JSF すべての会場(45ステージ)で出演者が

“鎮魂・祈り・再生”を願って「Aの音(ハ長調のラ音)」を1分間奏で、被災した方々に黙とうを捧げることになっていた。JSF

のパンフレッ



トによると「A(ラ)の音」は昔から、人間の心の中に深く響く音として、お寺の鐘の



ニューオリンズからの励ましの日章旗を掲げた外山夫妻を迎えての「ブライトキッズ」の演奏にもいちだんと熱がこもった

音や仏壇の鐘の音としても鳴らされてきた。また、赤ちゃんがこの世に生まれ出た時の泣き声も「Aの音」と言われているんですよ。

♪A～A～A…。聴衆全員が起立して黙とう！(写真左上)

この後、外山夫妻がここでもニューオリンズからの日章旗を示して、被災地のみなさんへのメッセージを伝える。演奏が再開されると、夫妻も加わって『上を向いて歩こう』が始まる。かつて外山夫妻ともども気仙沼、多賀城両市にテレビ取材クルーを派遣してくれた映像制作会社コスモ・スペースの青木秀臣社長(グレン・ミラー生誕地協会日本支部代表)が「やあ、やあ！」と歩み寄る。会場には航空自衛隊と米空軍「三沢基地」(青森県)のTシャツを着た米軍関係者ら？の姿も。

この日宿泊したのは多賀城市。仙台市内のホテルは復旧復興関係の企業が長期間押さえてしまっているらしく、

どこも予約が取れなかった。結局、ブライتكィズの父兄が奔走して(顔を利かせて?)くれて、仙台市と隣り合わせにある多賀城市内のホテルに無事投宿。さらには子供たちと父兄のみなさんをも交えた“晩餐会”まで開いてくれて歓談…いやはやご馳走様、いろいろとありがとうございました。で、翌11日朝は、ホテル近くのJR仙石線「中野栄」駅から電車で15分少々「仙台駅」へ出て、会場に向かうことが出来ました。

あの顔この顔…千客万来のWJFブース 米誌東京支局長も取材に駆けつける!

WJFのブースに戻ると、もう 宮城出身で東京・練馬区からやってこられた WJF 会員の宮城健さん、究極の「フカヒレ井」で知られる気仙沼市、寿司処「大政」の清水直喜さんご夫妻。清水さんは大震災でお店もすべて失った。「津波に追われて逃げました。職人が目の前で流されていって…」と声を落とすが、「実は私たちの孫娘がスウィング・ドルフィンズにいてトロンボーンを吹いていたんです。今はもう高校生でギターをやっています」と笑顔も見せてくれた。ブライتكィズのトランペッター、黒石優太君も乳母車に妹さんに乗せたお母さんと一緒に来訪。雄太君は写真パネルに載った自らの“勇姿”を見つめる。おや、粋な帽子をかぶった外国人がにこやかに「こんにちは!」。なんとこの方、雑誌「エコノミスト(The



Economist)」の東京支局長、ヘンリー・トリックス(Henry Tricks)さん。WJFの活動などを本にしたいとかで、外山夫妻を熱心に取材(写真上)し、ブースをじっくりと見て回っていた。前述の青木さん、仙台放送の広報戦略局長兼番組審議室長の佐々木鉄男さんも…。

午前11時、メインステージでの演奏が始まる。最初にステージに上がったビッグバンドを指揮し、その真ん前でテナーサクスを吹いているのは、WJFの例会などにもしばしば出演している田辺信男さんではありませんか。福島市を中心に活動する、この社会人ビッグバンド「Snow Rabbit Jazz Orchestra」を指導されてい



るようだ。

「スウィング・ドルフィンズ」の晴れ舞台 取材陣も! ステージ前広場は超満員

さあ、午後2時20分からはニューオリンズからの支援で甦った気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」の晴れ舞台(写真左)。須藤丈市会長の指揮でバ



ンドテーマ『ムーン・ノクターン』に次いで『グリーン・ドルフィン・ストリート』で幕を開ける。会場の広場は通り道もなく、動きが取れないほど超満員の聴衆で埋め

尽くされていた。

「ニューオリンズからの支援で揃った楽器…今日は“日本のサッチモ”外山喜雄さんと奥様の恵子さんをお迎えして夢のようなセッションが実現しました」と挨拶に立ったのは、菊田わかさん(中3=ts)。「自然災害…地震、雷、火事、(小さな声で)オヤジ(爆笑!)…ご心配をおかけしましたが、私たちはもう大丈夫です!」と埋め尽くした観客のみなさんに実にはきはきと元気に、そしてユーモラスに呼びかけ、演奏曲目もすべてしっかりと伝える。そしてこの日、大震災からちょうど半年の午後2時46分を迎えての全会

場「A(ラ)の音」の1分間追悼演奏。外山夫妻もステージ脇でこれに合わせる(写真左)。立ち上がって黙とうする方、座って目を閉じ、手を合わせる方、涙を抑える方…そんな光景が目には焼き付く。

『ルート66』『リパブリック賛歌』『ウッド・チョッパーズ・ボール』『ソング・フォー・ユー』『アメージング・グレイス』『故郷(ふるさと)』(これには、また涙)…10曲以上もの熱演、喝采。アンコールは元気よく『マック・ザ・ナイフ』。終わってMCのインタビューに答えていた菊田さ

ん、「初めは緊張しましたが、楽しく演奏できました。いま、中学3年ですので、スウィング・ドルフィンズでの最後の年になりましたが、楽器は続けていきたいと思っています」と。

外山夫妻、佐々木さんも MC に招かれて、日章旗とともステージ前に。3人がそれぞれこれまでのニューオリンズとの連携ぶりを伝え、「ニューオリンズを始め、みんなが被災地の

皆さん方を応援してくれています。どうか頑張ってくださいね」と激励の言葉も送り、会場から大きな拍手。そのためか？WJFのブースはまたまた大賑わいだった。

そうそう、このニューオリンズからの日章旗は、佐々木さんのお店に飾られることになった。仙台にお出での節は、みなさんもぜひ、粋なジャズ・カフェバー「ジャズ・ミー・ブルース nola」へどうぞ…と、ちょっぴりPRも。

外山夫妻、地元のバンド2組とも共演 JSF最後のナイト・ステージを沸かせる

外山夫妻の JSF 最後の演奏は、メイン会場から歩いて数分の「せんだいメディアテーク」での“ナイト・ステージ”。



宮城・角田市のハインサイエティ・デキシーランド・ジャズ・バンドのピックアップ・メンバーやジャンピング・クロウとのスペシャル・バンドでの出演。『バーボンストリート・パレード』

『ハロー・ドーリー！』『この素晴らしき世界』…次々と熱い演奏が続き、もちろん最後は『聖者の行進』が会場を巡回する。ニューオリンズからの励ましの日章旗がこれを見守る。喝采を受けての外山さんの挨拶、「“ノリの都”（杜の都！？）だけあってみなさん本当にノリがいい

…」にも反応よく、笑いの渦が巻き起こった。午後6時ちょっと前、みなさんへのご挨拶もそこそこに「早く、早く！」と会場を出て、タクシーで仙台駅へと急ぐ。だって、すでに買ってある東京行きの新幹線は、午後6時33分ですよ！なんかこの2日間、走り回った感じです。

佐々木さんからは後日、コースターなどの売上金から5万円が被災地支援に寄贈された。佐々木さんはさらに“支援プロジェクト”などにも、義援金を贈られている。佐々木さん、ボランティアのみなさん、ありがとうございました。ご苦労様！！

(小泉良夫)

スペースの関係もあり、前回の会報69号でご紹介できませんでしたが、バンドの子供たちから、早々にお礼の手紙をいただいている。遅ればせながら掲載させていただきます。

日本レイ・アームストロング協会のみなさんへ

日本レイ・アームストロング協会のみなさん スウィング・ドルフィンズのためにたくさんの楽器を贈っていただきありがとうございました。



私は3月11日の大震災で家は、津波で全壊し、家にあった物は何も残っていません。なので、借りていたA. SAXも流されました。1ヵ月以上も楽器を吹くことができなくて、とても吹きたくてたまりませんでした。

たくさんの方々のおかげで、楽器を久しぶりに吹いた時は、とてもうれしかったです。

たくさんの方々に喜んでもらえるような演奏をしていきたいと思っています。

気仙沼ジュニアJAZZオーケストラ スウィング・ドルフィンズ
A. SAXパート 鈴木 悠公(写真上の中央)

多賀城ブライトキッズ OB の千葉隆彦です
母から、外山さんの奥さんが退院したことを聞きました
まだ痛くてピアノが弾けないと聞き心配しています

大丈夫でしょうか？

自分も体育の授業で、足首を骨折しました
8月中旬まではギブスをします
暑くて、かゆくて、大変です

お礼が遅くなりましたが、先日はブライトキッズのために沢山の楽器をありがとうございました
ピッカピカの楽器にメンバーも大喜びで練習しています
9月の定禅寺 JAZZ フェスにも出演が決まりました
頂いたピッカピカの楽器で演奏します

ティピティナス財団、カーバー高校、オー・ペリー・ウォーカー高校、ルーツ・オブ・ミュージック、TBCプラスバンドの関係者の方達
コラムニストのシーラさん

そして日本レイ・アームストロング協会の皆さん

ジャズ・ミー・ブルースnolaの佐々木さん

そしてたくさんのサッチモファンの皆さん

本当にありがとうございました

ブライトキッズは皆さんとサッチモの魂のこもった楽器で

また演奏する事ができます

その魂の音で少しでも被災地の皆さんが笑顔になれる様
亡くなった方々が癒されるよう、演奏してくれると思います

自分も、また JAZZ バンドを組んで

お世話になった皆さんに

お礼の音を届けられる日が来るよう頑張ります

いつかニューオリンズにお礼に伺います

「スウィング・ドルフィンズ」が横浜JAZZプロムナードに出演、元気に跳ねた！！

「私たちは気仙沼から泳いできました」ドルフィンらしくスピーチもユーモラス！

気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ(SD)」はその後、定禅寺ストリートジャズフェスティバルの余韻も冷めない翌10月9日、横浜市内各所で開催されていた「横浜JAZZプロムナード」(8～9日)にも、元気な姿を見せた。

午前11時、横浜みなとみらいエリアのクイーンズパーク。「私たちは気仙沼から太平洋を泳いで横浜に渡ってきました」と、今回もスピーチに立ったバンドMCの菊田わかさん(中3=ts)が、横浜再デビューを笑顔でユーモラスに横浜市民に呼びかける。今回、彼女たちを招待した同プロムナード実行委員会事務局、鶴岡博さんも「ジャズファンの皆様からのご寄付で、今年もまた『スウィング・ドルフィンズ』をお招きすることが出来ました。今年で4回目になります」と、にこやかに歓迎の挨拶。

さっそく須藤丈市会長の指揮でバンドテーマ『ムーン・ノクターン』にのって演奏が始まる。続いて『オン・グリーン・ドルフィン・ストリート』『サニーサイド・オブ・ザ・ストリート』など“ストリート・メドレー”。『故郷(ふるさと)』も出だし、横浜にちなんだ歌唱入りの『赤い靴』もよかったね。この歌を歌った女の子は、ちゃんと赤い靴を履いていた！

正午から横浜みなとみらいホール大ホールで菌田憲一とデキシーキングズともども出演が決まっていた外山喜雄とデキシーセインツだったが、外山夫妻は、このSDの演奏会場にもはせ参じて、『ジェリコの戦い』と『ウッドチップパーズ・ボール』の2曲を共演、WJFの活動も、横浜のジャズファンにしっかりと伝える。

「いやあ、この度のことは何から何まで外山ご夫妻のお陰ですよ」と須藤さん。この日のSDは、全員赤いユニフォーム姿で登場、フルバンドの譜面台も以前のものが“復活”していた。「ええ、ユニフォームだけは無事だったんです。譜面台は海水を浴びてしまいましたが、何とか作り直しました」と須藤さん。避難所生活だった部員も、仮設住宅に移ったという。



「ええ、ユニフォームだけは無事だったんです。譜面台は海水を浴びてしまいましたが、何とか作り直しました」と須藤さん。避難所生活だった部員も、仮設住宅に移ったという。

外山夫妻からディズニーグッズなど、SD全員にかわいらしいプレゼント。さらに先頃寄贈されていた真新しいトランペットも tp 部員に手渡された。この日、地元の横浜立野庭中学校の女生徒たちが黄色い T シャツ姿で応援

に駆けつけ、ステージ横で手拍子や声援、終了後も SD と交歓の輪を広げていた。この日 SD 一行は夜行で帰郷し、翌日「体育の日」はみんな運動会だったそうです。

「スウィング・ドルフィンズ」は、その後、11月26日、東京ディズニーランドにもやってきて外山夫妻と再会、イクスピアリでの演奏や園内を大はしゃぎで見て回るなど、楽しい一日を過ごした。

「スウィング・ドルフィンズ」は、その後、11月26日、東京ディズニーランドにもやってきて外山夫妻と再会、イクスピアリでの演奏や園内を大はしゃぎで見て回るなど、楽しい一日を過ごした。

内を大はしゃぎで見て回るなど、楽しい一日を過ごした。

(小泉良夫)

「いやあ、この度のことは何から何まで外山ご夫妻のお陰ですよ」と須藤さん。この日のSDは、全員赤いユニフォーム

(写真下段は、この日、横浜で熱演したセインツ)

ニューオリンズから手作りの“励まし日章旗”を送ってくれたピアニスト 現地のミュージシャンからのサインとメッセージを求め奔走した小牧恵子さんからの心温まるメール

日本の皆様へ

私は、ニューオリンズでピアニストとして活動している小牧恵子と申します。5年前より、日本からニューオリンズに移り住み、現在ニューオリンズで、ブルース、ジャズを弾いています。

この度は、ニューオリンズからの応援メッセージの旗がようやく完成したので、送らせていただきました。日本の震災後、ニューオリンズのいろいろなミュージシャンから日本への応援のメッセージ、サインをもらいました。日本の方々に、少しでもニューオリンズから元気を送ることができれば、幸いです。

東北の地震後の3月後半より、ニューオリンズでは、数多くの日本の為のチャリティーコンサートがひらかれました。ニューオリンズは、2005年ハリケーンカトリーナによって大打撃を受けた街。それだけに、カトリーナよりも被害の大きい日本の地震、津波、原発のニュースは彼らの目には衝撃的で、多くの人と一緒に涙していたように思います。こんどは、私達が日本を助けてあげる番だと、数多くのミュージシャンたちが日本の為義援金を募っていました。

そういう想いを何かに残して日本に伝えられないかな、と思い、3月21日にひらかれたBrass-a-holics主催の日本の為のチャリティーコンサートの際に日本の旗をつくり、(こちらでは、日本の旗すぐに手に入らなかったの、手作りになりました)

その時から、関わってくれたミュージシャンにメッセージを書いてくれるよう旗をいろいろなところに持ち出しては、この5か月間、メッセージを集めてきました。

Tipitna Foundolon主催のInstruments cominや、New Orleans Japan Club主催で、Jamming for Japan (George Porter Jr, Kermit Ruffinsが演奏)も、その一つのチャリティーイベントです。

ニューオリンズでは、ハリケーンカトリーナの2か月後、街に入る事をようやく許された街の人たちは、ニューオリンズでは音楽の火を絶やしたらいけない、と、John Gros (Papa Grows Funk), Walter Wolfman Washington, June Yamagishi等が、電気の帰ってきていないMaple Leaf Barにジェネレーターを持ち込んで暗い中、ソロ、またデュオのライブをやって皆を励ましたといひます。

そして翌年2月にはマルディグラのお祭り、4月末にはNew Orleans Jazz and Heritage Festivalを決行しました。

そのとき、大部分の人は街に帰ってきておらず、街自体も復興していない中のフェスティバルの開催にいろいろな反対意見をいわれていましたが、その音楽、また音楽を愛する人達によって大きな力がニューオリンズに戻ってきたのを覚えています。それから

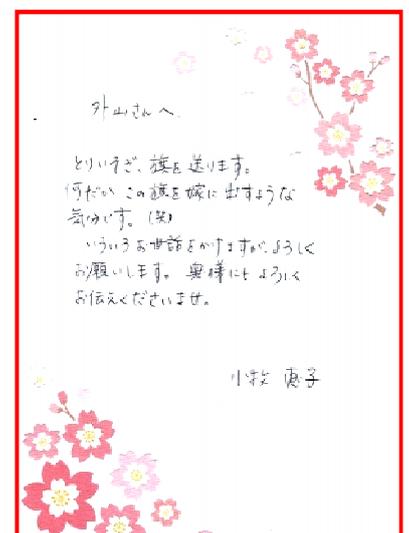
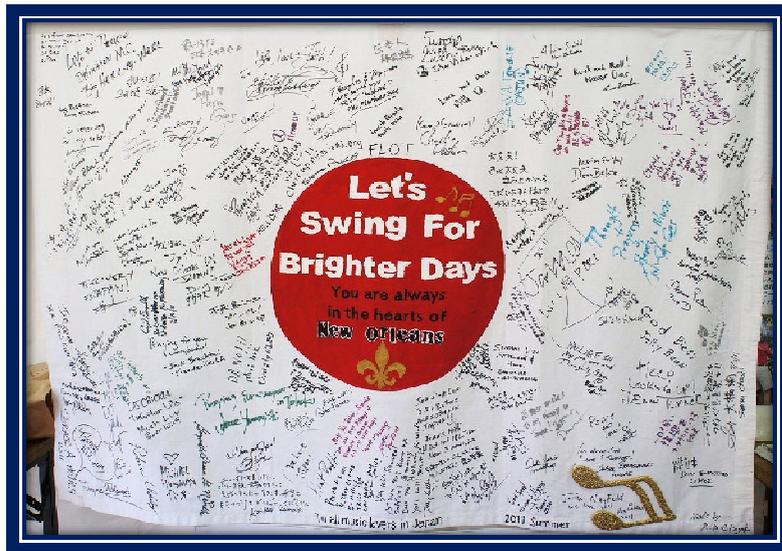
6年がたち、完全に戻ったとはいえませんが、ニューオリンズは音楽の力によって復活しました。

今、日本は、いろいろと大変だと思います。皆様、頑張ってください。

より早い復興を心より、お祈りしています。

この応援の旗は、そんな音楽の街に住むニューオリンズのMusic Lovesから、日本の皆様、日本のMusic Loversに送ります。

2011年8月23日
小牧恵子
from New Orleans



新春2日間3公演！ 外山喜雄・恵子夫妻がお届けする

千葉市で巡るマエストロの旅 Vol.1 What a Wonderful World

～生誕110年記念 Jazz の巨匠ルイ・アームストロング～ たったひとりで Jazz を世界の文化にした男の物語

“サッチモ”の愛称で知られる Jazz 界の巨匠ルイ・アームストロング。20世紀を代表するJAZZミュージシャン、エンターティナーとして、数々の名曲・名演を残した“サッチモ”の偉大な功績と魅力を、2日間3公演をかけて、多彩なゲストと共にご紹介致します。

ジャズ界の真のマエストロ…それはジャズ王、ルイ・アームストロングです。ジャズの生まれた街ニューオリンズのスラム街に生まれたルイは11歳の時、ピストルを発砲し少年院に入られます。でも、そこでトランペットと出会い、天才ジャズプレイヤーとしての一生を送りました。

映像としてのサッチモの姿は、若き日1932年から他界する1971年まで40年近い間の映像が残っています。また、レコードに残されたサッチモ…初吹き込みは1923年、1971年までこちらも50年近い年月、数々の名演をレコーディングし続けました。

“たった一人でジャズを世界の文化にした男”と評されるルイ…1920年代ルイの斬新なジャズ感覚は世界の音楽を変えるほどの影響を多くのミュージシャンに与え、ジャズを作った

張本人といわれます。トランペッターとしてのみならず、歌手としてジャズボーカルやスキットの斬新な感覚を生み出したのも、若き日のルイ・アームストロング。数々のヒット映画やヒットレコードをもつ世紀の大スターという顔も忘れることはできません。

この千葉で巡るマエストロの旅、ルイ・アームストロングは、私たち外山喜雄・恵子がトランペットとバンジョー片手に、貴重なサッチモのレア映像、サッチモを生んだジャズの故郷ニューオリンズ、そして若き日のサッチモの世界と彼の大ヒットなど、全てをライブ演奏とトークの3コンサートでご案内する音楽の旅です。

どうか、千葉で巡るマエストロの旅…サッチモのワンダフルワールドにご期待下さい！

■1月6日(金)

18:00～ 千葉市美浜文化ホール

映像が語るサッチモのワンダフルワールド！

秘蔵映像で巡る“銀幕スター”サッチモの世界！

一般¥1,500 中学生以下¥1,000(全席自由・税込)

【出演】外山喜雄・恵子夫妻、佐藤修

司会：露木茂、山口義憲

早稲田ニューオールリンズジャズクラブ

■1月7日(土)

18:30～ 千葉市文化センター

SPECIAL LIVE!

～この素晴らしきサッチモの世界～

サッチモの魅力満載のスペシャルコンサート！

一般¥2,500 中学生以下¥1,000(全席自由・税込)

【出演】外山喜雄とデキシーセインツ(メンバーは同右上)

大原保人(p)、金子晴美(vo)

小川理子(p,vo)、早稲田大学ニューオールリンズジャズクラブ

司会：山口義憲

■1月7日(土)

13:30～ 千葉市若葉文化ホール

ルイ・アームストロングとジャズの歴史

軽快なトークと実演で Jazz の歴史をひも解く！

一般¥2,000 中学生以下¥1,000(全席自由・税込)

【出演】外山喜雄とデキシーセインツ&小川理子(p,vo)

早稲田ニューオールリンズジャズクラブ 司会：山口義憲

セインツのメンバーは、外山喜雄(tp,vo)・恵子(p,bj)、広津誠(cl)、粉川忠範(tp)、藤崎羊一(b)、サバオ渡辺(ds)

【同時開催】サッチモコレクション！

■1月6日 千葉市美浜文化ホール

■7日 千葉市文化センター

時間は開演の1時間半前から

日本一のサッチモコレクターとして知られる佐藤修さん(株ポニーキャニオン取締役相談役)から、サッチモゆかりの貴重な品々をお借りし、「サッチモコレクション(展示会)」を開催！他ではめったにお目にかかれないような貴重な品々は必見！

主催：アートプレクスちば事業体 共催/監修：日本ルイ・アームストロング協会

協力：早稲田大学校友会千葉県支部千葉稲門会、早稲田大学ニューオールリンズジャズクラブ稲門会

早稲田大学ニューオールリンズジャズクラブ

(9面からの続き)

墓参の後の昼食は、これもすっかりツアー定番となったブラジルのバーベキュー料理レストラン「グリーンフィールド」へ。これだけでもう食べきれないほどの各種前菜に続いて、何でもありの焼き肉料理食べ放題。ビールにワイン、カクテル…。

この後、ニューヨーク最後の夜は自由行動でしたが、例年ツアーに参加されている中村宏さん(ジャズ評論家、防衛医大名誉教授)ご夫妻からのお招きを受けて、「長年のお友達なんですよ」という美人歌手、あの“ニューヨークのため息”ヘレン・メルルさんとの会食のご相伴にあずかってしまった。外山夫妻らとともどもヘレンさんちの近くにある日本料理店「DONGURI」へ。そうそう、この席で中村夫人の美代子さんが、とってもいい、とっておきのお話を披露。

同行の磯野博子さん(ジャズ評論家・故いソノてルヲ氏夫人)らと、ニューヨーク市内でのお買いものに立ち寄ったお店で

のこと。お金を払う際、店員さんの1人が美代子さんの付けていたWJFのバッジを見て、「それってサッチモではありませんか?！」と。

「私、外し忘れてお買い物の中もずっと付けっぱなしにしていたんです」と美代子さん。「そうですよ！って、いろいろ説明してあげましたら、その店員さんがほかの店員さんたちも呼び集めて大騒ぎ…。それでどうなったと思います? 『今お買いいただいたお品の税金分は、すべて差し引かせていただきます』って!!」

なんと、WJFバッジには“免税”効果があるんです!?

楽しいお話とご馳走…日本酒もたっぷりいただいて、ほんと、ありがとうございました。…だからニューヨーク、アメリカって大好きなんです。

(小泉良夫)

特別寄稿

モダン・ジャズ全盛期に

トラッド・ジャズを聴かせた2軒のジャズ喫茶

(全69号の「渋谷スイング」編から続く)

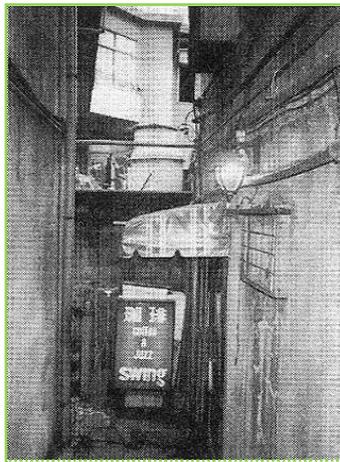
——柳澤 安信 (WJF 会員、白人コルネット奏者ビックス・バイダーベック研究家)

<水道橋スイング編>

中国の駐屯地で聞いたビリー・ホリディ 店主・柴田榮一氏とジャズとの出会い

「水道橋スイング」は国電水道橋駅脇の神田川の川っぶちにあった。御茶ノ水側(東口)改札口を出て、水道橋を渡ってすぐ左手、すし屋の横の細い石段を降りた地下のお店だった。

今の「たこ坊」というたこ焼き屋のあたりだ。店内は逆L字形に曲がっていて、ドアを開けて中に入ると、正面奥に左右形の違った古ぼけたスピーカーが2台、右手にアップ・ライト・ピアノが置かれていた。奥を左に曲がった右手にカウンターがあった。ここで昭和45年



在りし日の水道橋スイング

ごろ若き日の村上春樹が1年ぐらいアルバイトをしていたことは、有名な話である。歌手の金丸正城氏もこの店の出身だ。

店主は柴田榮一氏である。柴田さんは大正7年(1918年)3月20日東京の生まれ、ジャズとの出会いは軍隊で中国に渡っていた頃だという。中国の田舎の部落に駐屯していたとき、ポータブル蓄音機でビリー・ホリディを聴いたそう。復員後読売ホールでレイモンド・コンデ、昭和28年(1953年)11月にJATPの来日公演、12月にはルイ・アームストロング・オールスターズも来日、32年にはベニー・グッドマン・オーケストラの公演などを聴き、ジャズに没頭するようになった。

「銀座スイング」から“のれん分け”？ 渋谷と逆行してモダンからトラッドへ

「水道橋スイング」の開店は昭和32年(1957年)12月14日である。ジョージ・ルイスが好きで集めた10寸のSP盤を一人で聴いているのはもったいない、皆さんに聴いてもらおうと思ったのが動機だという。当時柴田

さんは「銀座スイング」の常連で、「店をやってみたい」とマスターの宮沢さんに相談があり、「それなら同じスイングという名にちなさい」と宮沢さんは「おれがのれん分けしてあげた」というていた。

開店一周年に油井正一、大橋巨泉両氏によるレコード・コンサート、二周年には油井正一、牧芳雄の2氏を招いてレコード・コンサートが行われた。当時はまだモダンとかディキシーという区別がなく、何でもかかっていた。私は学生時代「渋谷スイング」の常連だったが、学校の関係で、授業が休講になるとよく「水道橋スイング」へ行って時間をつぶした。その時はいつもモダン・ジャズがかかっていた。私はディキシーが好きだったので、渋谷の方に頻繁に通い、昼間に時たま水道橋へ

行って楽しむというパターンだった。ところが会社勤めが始まって間もなく、渋谷の方がディキシーをやめてモダンに変身してしまった。それが昭和40年代の初め頃だったと思う。それからは渋谷への足は遠のき、「水道橋スイング」が主なジャズの聴き所となった。水道橋の方は逆にモダンからトラッドへと移行していった。

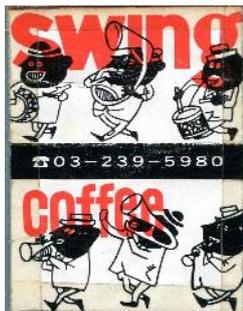


水道橋スイング広告

常連が「ジャズ・マニア・クラブ」結成 土曜日の夜はレコード情報の交換を

ビリー・ホリディのファンでジャズ評論家の大和明(平成20年9月没)氏は開店当初からの常連だった。同じ常連に村山和春氏や鳥本哲也氏がいて、彼らは村山氏を会長に「ジャズ・マニア・クラブ」を結成、月に1回土曜日の夜に話題の新譜を紹介するコンサートを開いた。新譜レコードは山野楽器の有田昭一氏が提供した。この催しは3年ほど続いたという。その後この仲間にテディ・ウィルソンのファンで世界的なコレクター瀬上保男(平成19年2月没)氏やバック・クレイトンのファンでポリドール・レコードの岡村融氏が加わってきた。

更にそこへ渋谷からの流れ者の私、ファッツ・ウォラーの研究家梶山雄作(平成4年1月没)氏、日劇ミュージック・ホールの小林佳弘氏、うわさを聞いてホット・クラブの若手会員らも集まった。このような強力なメンバーが毎週土曜日の夜に「スイング」に集まり、トラッド・ジャズを聴きながらレコードの情報交換をするようになった。皆「スイング」に集まる前に、数寄屋橋のハンター、新宿駅西口のトガワとオザワを廻って、掘り出し物を自慢げに持ち寄っていた。



水道橋スイングマ
ツチ箱

ニューオリンズ・ジャズの蒐集は完璧 「大学ディキシー連盟」の学生も参集

柴田さんの話では、最も多くかかったレコードは、こゝでも「Jass at Ohio Union」だったという。この2枚組みアルバムは元々海賊盤で、日本には10組程度しか輸入されていないと聞いている。わが国で最も人気の高かったトラッド・ジャズは、このアルバムの中の「世界は日の出を待っている」であったことは間違いなさそうだ。柴田さんはニューオリンズ系のクラリネットがお気に入り、ジョージ・ルイスはもちろん、エドモンド・ホールも大好きで集めていた。お店のニューオリンズ・ジャズのコレクションは完璧で、リクエスト用に備えてあった分厚いファイルは、瀬上さんがタイプし贈呈したものである。

「水道橋スイング」で最初にライブを始めたのが、笠井義正バンドである。昭和35年(1960年)のことで「THE AGE OF BUDDY BOLDEN : Yoshimasa Kasai's New Orleans Jass Band」(Jupiter YK-601)は、10月23日にここで録音された貴重なレコードである。津村昭とストーリーヴィル・ダンディーズが発足したのもこの頃で、スイングで演奏した草分けだ。

渋谷と同様に「大学ディキシーランド・ジャズ連盟」の学生達も集まっていた。早稲田大学ニューオリンズ・ジャズ・クラブ、青山学院クレオール・ジャズ・バンド、工学院大学ディキシー・ダンディーズ、國學院大学カウ
ンツ・オブ・ディキシー、東京経済大学サウスランド・ジ

ャズ・バンド、芝浦工大リバーサイド・ディックス、武蔵大学クレオール・ストンパーズ、立教大学ディキシー・キャンプズ、慶応大学ディキシーランド・ジャズ・バンドなどのメンバー達も、レコードを基にニューオリンズ・ジャズの演奏方法を研究していた。

ライブも始まり「〜ラグ・ピッカーズ」誕生し 赤坂のライブ・ハウス“類”へと発展したが

そしてこのファンの中の太田弘(武蔵大)氏を中心に、昭和40年(1965年)12月スイング・ハウス・バンドが演奏を始めるようになった。初めはテナー・サクスをメインにしたスイング・スタイルだったが、トランペットの加藤晋一(青山学院)氏やドラムの木田三七雄氏が加わって、ニューオリンズ・ジャズを目指すようになり、ここに「ザ・ニューオリンズ・ラグ・ピッカーズ」が誕生した。ラグ・ピッカーズは毎週木曜日に定期演奏をするようになり、練習は土曜日の閉店後に行っていた。我々のレコード・グループも土曜日の夜に集まっていたのでお



水道橋スイングにて(昭和45年3月)＝後列左から;不明、沢島孝夫、筆者、梶山雄作
前列左から;岡村融、山中一男、瀬上保男、大和明の各氏

互い顔見知りにはなっていたが、木田さん以外は親しく話しをした記憶がない。バンドの人達から見ると我々は「理屈ばかり言ううるさ方」と思われていたに違いない。これは後になって加藤さんから聞いた話だが、早く練習を始めたい彼らは、我々達を「いい加減にして早く帰れ！」と皆思っていたとのことである。

木田三七雄氏は大変な熱

血漢で親分肌、東京のニューオリンズ・ジャズの顔的存在だった。彼のドラムスは如何にもニューオリンズらしいユニークなスタイルで、温かみと愛嬌があった。またジャズの知識も別格で、昭和47年(1972年)河野隆次氏がプロデュースして日本発売したアメリカン・ミュージック・シリーズ(Dan Record 20枚組み)では、山口克己氏と組んで「ニューオリンズ・ジャズ・人名辞典」を各レコードに添付、更にディスコグラフィも作成するなど評論家顔負けの仕事もこなしている。彼は1980年代の初めだったと思うが、赤坂TBSの斜向いに“類”というライブ・ハウスを開店したが、経営が思わしくなく我々の前から姿を消した。類は“類は友を呼ぶ”と“ルイ・アームストロング”を関連付けて、トラッド・ジャズ

の普及を目指したものであった。その後の彼の消息は知るよしもなかったが、平成18年になってラグタイム・コレクターの大矢儀一氏からの情報で、木田さんが5月に食道がんで死去したことを知った。長い間奄美大島でサトウキビ作りをしていたという。

「水道橋」はアマチュア・バンド発祥の地 開店記念で5年毎に定期演奏会も開催

このように「水道橋スイング」はアマチュア・バンドの発祥の地といってよい。ラグ・ピッカーズのほかにニューオリンズ・ノウティーズ、キャナル・ストリート・ジャズ・バンド、バイユー・ストンパーズ、大丸ニューオリンズ・ジャズ・メンなどが生まれた。その集大成として、定期演奏会が御茶ノ水の日仏会館で、開店10周年(1967年)、

15周年(1973年)、20周年(1978年)、25周年(1983年)、30周年(1988年)記念として行われた。お祝いに大阪からニューオリンズ・ラスカルズが駆けつけた年もあった。

従業員バンドが前衛的なモダン・ジャズを演奏したユニークなステージも思い出される。現在のニューオリンズ・ジャズの根強い人気は「水道橋スイング」なしでは考えられない。そのくらい大きな影響をもたらしたと思う。

この「水道橋スイング」も昭和60年(1985年)、駅前拡張工事のために飯田橋へ移転せざるを得なくなった。8月7日に開店した新しいスイングは、飯田橋駅東口を出て目白通りを九段方面にちょっと行き、新宿中村屋のところを右に曲がって淋しい路地を登っていったビルの地下になった。時代もLPからCDの時代に移り、欲しいレコードは誰でも購入できるジャズ喫茶の運営には厳しい社会環境に変化した。

そして33年半続いた柴田さんの「スイング」は、平成3年(1991年)6月22日ついに閉店した。当日はテレビの生中継も入り、全国のファンに惜しまれての閉店で、柴田さんも満足されたのではなかろうか。そのお店は現在タイ料理「ロツディー」になっている。

閉店後もミュージシャンとの交流深め 病気療養中も執筆活動を精力的に

店を閉めてからの柴田榮一氏は、アマチュア・ミュージシャンとの交流を更に深め、好きなニューオリンズ・ジャズの啓蒙活動に積極的に取り組んでいた。またホット・クラブ・オブ・ジャパンの例会にも参加するようになり、今度は我々のレコード・グループに仲間入りして一緒にレコードを楽しむようになった。平成9年には「ジャズ・ニュースレター」に「ニューオリンズ・ジャズ・リヴァイバル期のクラリネット奏者達」(Jazz Newsletter 1997, Vol.2 No.1)を寄稿している。しかし平成10年になり柴田さんは咽の手術をされ、以降外出を控え自宅療養を続けていた。その間にニューオリンズ・ジャズ・ソサ



飯田橋スイング閉店の日(平成3年6月)=立っている方の左から2人目が店主・柴田榮一氏

エティの機関誌に「ジョージ・ルイスの追憶」(Soul Union 第1巻第1号、第2号 2001年2月、8月)を寄稿、お元気になられたと思ったが、平成15年(2003年)7月13日突然亡くなられた。85歳だった。告別式で私は、式場に流れていたジョージ・ルイスの賛美歌を聴きながら、この年の1月に亡くなられた池上悌三さんと一緒に、この演奏を聴いているに違いないと思った。ニューオリンズ・ジャズの熱烈なファンであったお二人が亡くなり、ひとつの時代が終わったと感じた。

平成17年8月末柴田さんのご子息柴田純一氏が、目黒駅恵比寿寄りにライブ・ハウス「Jay J's Cafe」をオープンした。モダン・ジャズが中心だが、ヴォーカルやトラッド・ジャズも楽しめる。お店のカウンターは「水道橋スイング」の作りと良く似ており、スピーカーは柴田家の離れのリスニング・ルームに置かれていたアルテックで、大変懐かしく、落ち着いた雰囲気のしゃれたお店である。ゆかりの金丸正城氏のステージの他、ラグ・ピッカーズを去った東海林幹雄氏と加藤晋一氏のニューオリンズ・ジャズ・ハウズが、毎月第3土曜日の夜に出演している。(完)

<参考資料>

- ・ジャズ批評 No.72 「ありがとスイング！柴田榮一氏三十余年の思い出から」(1991年8月)
- ・ジャズ批評 No.75 最後の珍盤を求めて「水道橋スイング同窓会の巻」(1992年7月)
- ・スイングが知っているトラッド少史(開店20周年記念 柴田榮一編 1978年)
- ・ホット・クラブ会報 第84号 「水道橋、飯田橋スイングのマスター柴田榮一さん逝く！柳澤安信」(2003年8月)

**ご寄付と嬉しいお手紙
ありがとうございます！！**

- ◆加藤令子様（横浜市） バイオリン
- ◆大川路子様（豊島区） ギター
- ◆羽賀健悟様（福岡県） トランペット
- ◆ニューオリンズ オーペリー・ウォーカー高校
バイオリンと義援金 1830ドル
- ◆増井めぐみ様（杉並区） トロンボーン

前略 この度は協会の活動資料と共に丁寧にお手紙をありがとうございました。

今年4月の朝日新聞の記事には目頭が熱くなる思いが致しました。また、外山さまのご自宅も震災の被害を受けたとのこと、心よりお見舞い申し上げます。

大切な楽器を預けて本当に良かったです。有り難うございました。（増井めぐみさんからの便り）

- ◆阿部信之様（浦安市） アルトサクソ
- ◆矢谷憲一様（市川市） トロンボーン

矢谷さんは、早稲田大学校友会で早稲田学報の編集をご担当、私達外山喜雄、恵子が初めてのニューオリンズ滞在から一時帰国した41年前の1970年、早稲田学報にニューオリンズジャズという記事を掲載して下さいました！お嬢様がお使いになった楽器をご寄付。感謝。

横濱ジャズプロムナードに出演したスウィング・ドルフィンズに、トランペットを一点贈呈しました(写真下)。

楽器は、元NHK紅白歌合戦等数々の番組を担当された名プロデューサー勝田稔さんからご寄付頂いた、ご自身が吹いていたピカピカのヤマハのトランペット。勝田さん、有り難うございました！！



岩手県の和尚さま、中村義孝さま、ご夫婦で会員。お寺も、住居も、ゼロメートル地点だったそうで、津波で全て流されてお気の毒でした！心配して、お見舞いをお送りしましたところ、お元気そうで嬉しいです。墨痕鮮やかなお礼状を頂きました。

NHK横浜の番組で、中村さん撮影と思われる、子供達空港に出迎えてくれたシーンの、使用の承諾でお電話し、被災が判明しました。何となく、イメージで、お寺は山の方…という感覚があり、本当にビックリしました。(外山)

外山喜雄・恵子様

此の度は、私共の津波被災に対し激励のお便り、更に過分のお見舞い金まで賜り、心より御礼申し上げます。

外山御夫妻におかれましては、液状化による大きな被害を受けられたにもかかわらず、私共に心温まる御支援をいただき感謝致しております。

浜辺に面した海拔ゼロメートルに近い場所に、本堂と大小10棟程あった建物すべてが流失するのに5分とかかりませんでした。昭和10年代より集めたCDレコードはじめ、自慢の音源すべてと創刊号からとってのスイングジャーナル全巻、種々の日本ジャズ史の記録のたぐいも、すべて海の藻屑と消えてしまいました。

現在仮設の本堂を再建中の為、年末のコンサートは残念ながら不参加とさせていただきます。

世界中で一番行きかかった街ニューオーリンズで最高の感興に浸る事ができ、外山さんには深く感謝申し上げます。今後も会員として妻共々お世話になりたいと思っております。有難うございました。

末筆ながら御夫妻はじめアームストロング協会が世界に向け、ジャズの輪を広げ発展されますようお祈り致します。

御礼少々失礼させていただきます。

十一月二十一日

岩手県 中村義孝、喜世子拝

募集中！

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい！！

また皆様のお知り合いの方々に

ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

=WJF年会費=

- 一般会員(General Membership) ¥6,000
- 学生会員(Student Membership) ¥3,000
- 賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通：5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは：WJF事務局

TEL：047-351-4464

Fax：047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン：Yahoo,Googleで

ルイ・アームストロング

編集長から

各地のジャズフェスティバルは、東日本大震災の復興がテーマ ▼外山夫妻とニューオリンズから寄贈の楽器を手にした気仙沼の子供達の「スウィング・ドルフィンズ」の仙台と横浜での演奏レポートがトップ企画。仙台会場ではWJFのブースが開設され、ニューオリンズからの「激励の日章旗」がステージで披露されました ▼ジャズツアールレポートはニューヨーク編です。オイスターバーでの生ガキに舌鼓、ハーレムの教会でゴスペルを堪能し、乗車した地下鉄は「A列車」。サッチモハウス博物館では名物のセルマおばさんと旧交を温め、一緒にサッチモ夫妻のお墓参りへ ▼10ページの「千葉市で巡るマエストロの旅Vol.1」はWJFと外山夫妻の出身母体、早稲田大学ニューオリンズジャズクラブや稲門会および沢山のサッチモを敬愛する方々の協力を得てサッチモの足跡を映像、トーク、演奏と多面的に紹介するコンサートです ▼柳沢安信さんの「水道橋スイング」に、定期券を購入して通った青春時代が甦ります(山)